

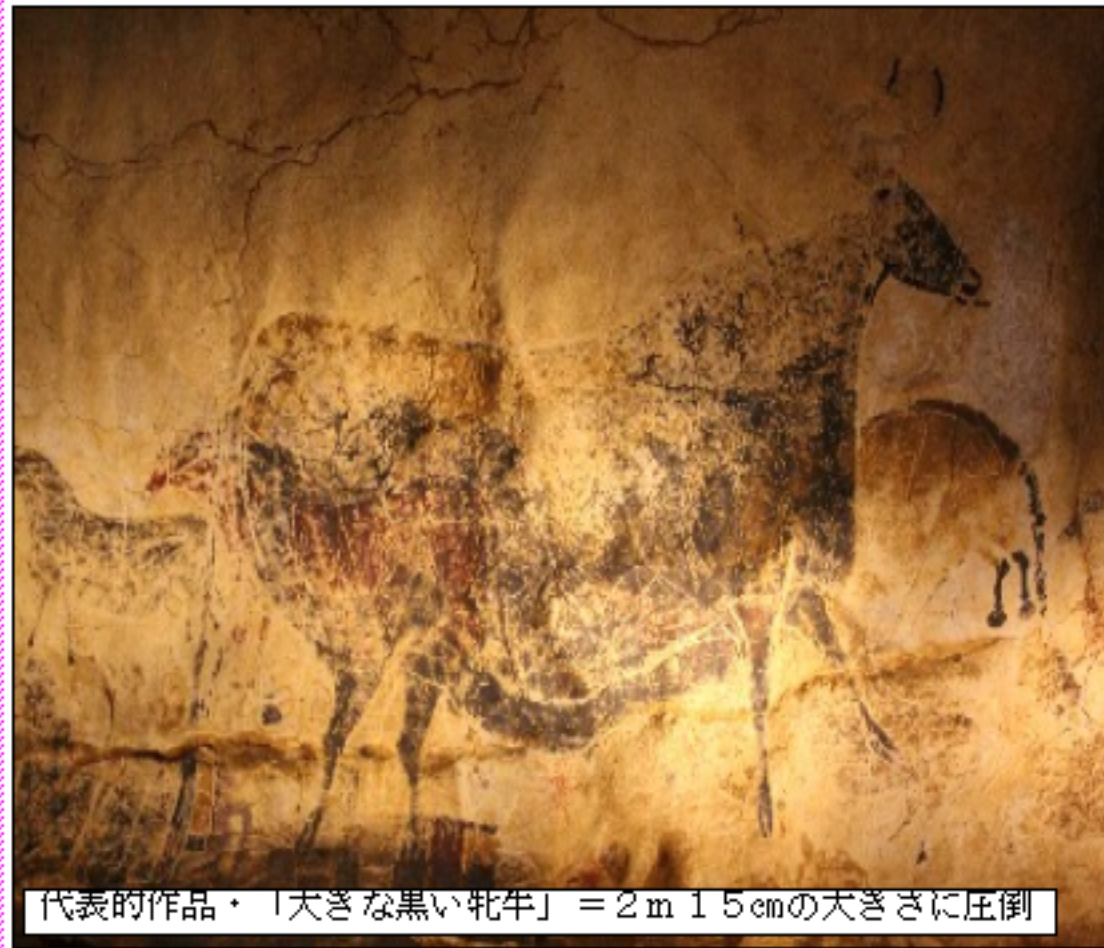


# 中央ふれす

所在地  
矢板市扇町2丁目1519  
矢板中央高等学校  
新聞部  
TEL43-0447  
FAX43-0899

## 本校新聞部が取材 プロの報道陣と一緒に 国立科学博物館

## クロマニヨン人が残した洞窟絵画



代表的作品・「大きな黒い牝牛」=2m15cmの大きさに圧倒



アクセサリーを付けた人骨

11月1日から来年2月10日まで、東京・上野の国立科学博物館で行われている特別展「世界遺産フスコウ展」で、クロマニヨン人が残した洞窟壁画の報道取材が10月31日に行われ、本校新聞部も多くの報道陣と一緒に取材した。

事前の打ち合わせで同博物館学芸課の松本泰和学芸員から、最初は遠慮がちな様子で、報道関係者は「本校生も一緒」といって思っている人も、かまわないけれど、頑張りなさいとアドバイスをくれた。生華の女性記者から励まされた。何かが取材を進めた。この企画展を監修した海部陽介同館長が、研究グループ長、五十嵐ジャンヌ東京藝術大講師は知識のない新聞部生にも質問にも丁寧に答えてくれた。一緒に取材している都立駒場高校の学芸員も、横目で見ながらカメラ担当は随分調子悪く、影をうけて、2万年前のクロマニヨン人の世界が再現された。

会場へ、プロがどう取材するか興味があったが、あまりに大勢の報道陣で、終えた。

「ひがしはら」 関が「早めには下野公園へ行って美術館を見てみよう」と言った。東京上野にある国立科学博物館が、依頼を受けて、ラスコーの洞窟壁画へ行く。絵画好きの関が提案した。新聞部は、随電講義の取材が入っていたから、少ない部員が手分けされて、朝のホームルームに出ないで職員多めに集合。僕ら4人は、関と共に矢板駅へ行き、残りの8人は、遠慮の先生と教習所へ向かった。改札を通過して、待合室へ入ると部長の携帯が鳴った。担任からのようだが、部長は「学校へ戻ります。入試の準備を出してから東京へ向きます」と慌てている。関が「願書を出して、この日はと問いかける。この日、本学大試願書締切日なのに、まだ出さなかった部長。いくを待たせても来ず、一切符を紛失して警察と職員どもを探している」とメールが来て、一回帰る。内覧会受付時間、間に合ったものの、全員が受付を止めてしまった。関は、開始前機嫌を隠さず、部員を叱りつけている。不安だらけの取材。準備している。この書は、いつたい誰であるか。心の中を叫んだ。

### 部説



新聞部といえば、取材し、記事を書き、パソコンを使って編集し、レーザープリンタで発行するというのが作業だ。でも気をつけることはたくさんある。校閲作業は最たるものだが、部員として苦しい作業としてイラスト描きがある。以前、美術部にイラストを依頼したことがあったが、新聞

## デフォルメされた美しい絵画

## ラスコーの動物たちに魅了

部の要求する記事に合わせたイラストではなくて、けんか別れのような形で美術部との関係は思わしくない。その後、美術部が廃部となり、新聞部の誰かがイラストを担当して描いている。現在、イラストを担当している

が、同期の1年生の中で、一番絵が上手だからという理由だ。特別に上手なわけがないので、毎回苦しい。なぜ私を連れ

東京行きの新幹線に乗った。大勢のプレス関係者で内覧会会場は熱気に包まれていた。どこのか理解できないが、「あなたは記事を担当しているわけじゃないが、写真を撮ってください」とカメラを手渡され、

幼稚にみえる素晴らしい壁画ばかりだ。私はどうしても対象をきちんと描かなくてはいけないという意識が強い。ラスコーの洞窟壁画を見たからと言って、私の絵の技術が向上するわけでもなく、圧倒されただけに終わったけれど、写真を撮りながら、2万年の時を越えてクロマニヨン人が私に乗り移って自由に描かせてくれたら、強く願った。



# ラスコー展日本で実現でき嬉しい 海部陽介さん

国立科学博物館人類学研究所・人類史研究グループの長で、ラスコー展の監修者である海部陽介さんは「4年前から準備をしていました。フランスでは広く知られていますが、ラスコーの壁面には、洞窟壁画のほとんどは、発見されてから100年以上経ち、色褪せたり、剥がれたり、劣化が進んでしまっています。そのため、海外で保存状態の良い洞窟壁画を借りて展示する必要がある」と話している。

海部さんは「ラスコー展は、洞窟壁画の魅力を多くの人に伝えるための重要な機会です。ぜひ多くの人に楽しんでほしい」と話している。



来場者の中には、洞窟壁画の魅力を伝えるための重要な機会です。ぜひ多くの人に楽しんでほしい」と話している。

## クロマニヨン人 絵画能力高い

### 五十嵐ジャンヌさん

今回の特別展「クロマニヨン人」の監修者である海部陽介さんと、フランス国立科学博物館人類学研究所のジャンヌ・五十嵐さんとの対談が、今回の特別展の大きな特徴の一つである。五十嵐さんは、洞窟壁画の魅力を伝えるための重要な機会です。ぜひ多くの人に楽しんでほしい」と話している。



ジャンヌさんは「洞窟壁画の魅力を伝えるための重要な機会です。ぜひ多くの人に楽しんでほしい」と話している。

## ラスコー洞窟壁画



背中合わせのバイソン



ラスコー洞窟壁画は、フランス南部のドール・ニエールにある、第2次世界大戦中の1940年9月12日に近くで遊んでいたモンペイニヤック村の子供たちによって発見された。



発見後はその壁画を見るために大勢の見物客が押し寄せた。地下空間は全長約200m、地表下200m以内にある、3つの深洞が構成されている。この洞窟にクロマニヨン人たちは合計約500頭の動物と多くの記号を残したといわれる。

洞窟の内部環境が華化し、壁画が急速に劣化した。壁面が急遽劣化した。壁面が急遽劣化した。

**クロマニヨン人はホモ・サピエンスだ**

発見後には、1900年代に現在でも一般に洞窟壁画は、非人間によって描かれたものであると考えられていた。しかし、1960年代にフランスの考古学者が、洞窟壁画の多くは、クロマニヨン人が描いたものであることを明らかにした。



復元されたクロマニヨン人

クロマニヨン人は、約6000年前にフランスのクロマニヨン洞窟で、石器時代を治王した。体の骨格は、現代の人間とほぼ同じである。後期旧石器時代と呼ばれる4万2000年〜1万4500年前頃のヨーロッパに住んでいた。身長は平均が男性で176cm、女性で164cmと大柄だ。

**現代人と変わらない顔つきで姿**

それと、現代人とほぼ同じ顔つきで姿。現代人とほぼ同じ顔つきで姿。

**毛皮の加工**

クロマニヨン人の石器。毛皮の加工。



スプーン型ランプ

真暗な洞窟内で絵がかけられたのは、長さ22.4cmの石でつくられたランプ型のランプで、明かりを灯したか。燃料は動物脂。芯としてススキの小枝を入れた。獣脂ランプをいくつも灯して動物を捕らえたのだ。

**明かりで描く**

真暗な洞窟内で絵がかけられたのは、長さ22.4cmの石でつくられたランプ型のランプで、明かりを灯したか。燃料は動物脂。芯としてススキの小枝を入れた。獣脂ランプをいくつも灯して動物を捕らえたのだ。

クロマニヨン人は、石や骨を利用して様々なタイプの槍をつくった。このように狩猟の多様化は、ネアンデルタール人の文化には見られないものがある。

**多様な狩猟**

クロマニヨン人は、石や骨を利用して様々なタイプの槍をつくった。このように狩猟の多様化は、ネアンデルタール人の文化には見られないものがある。